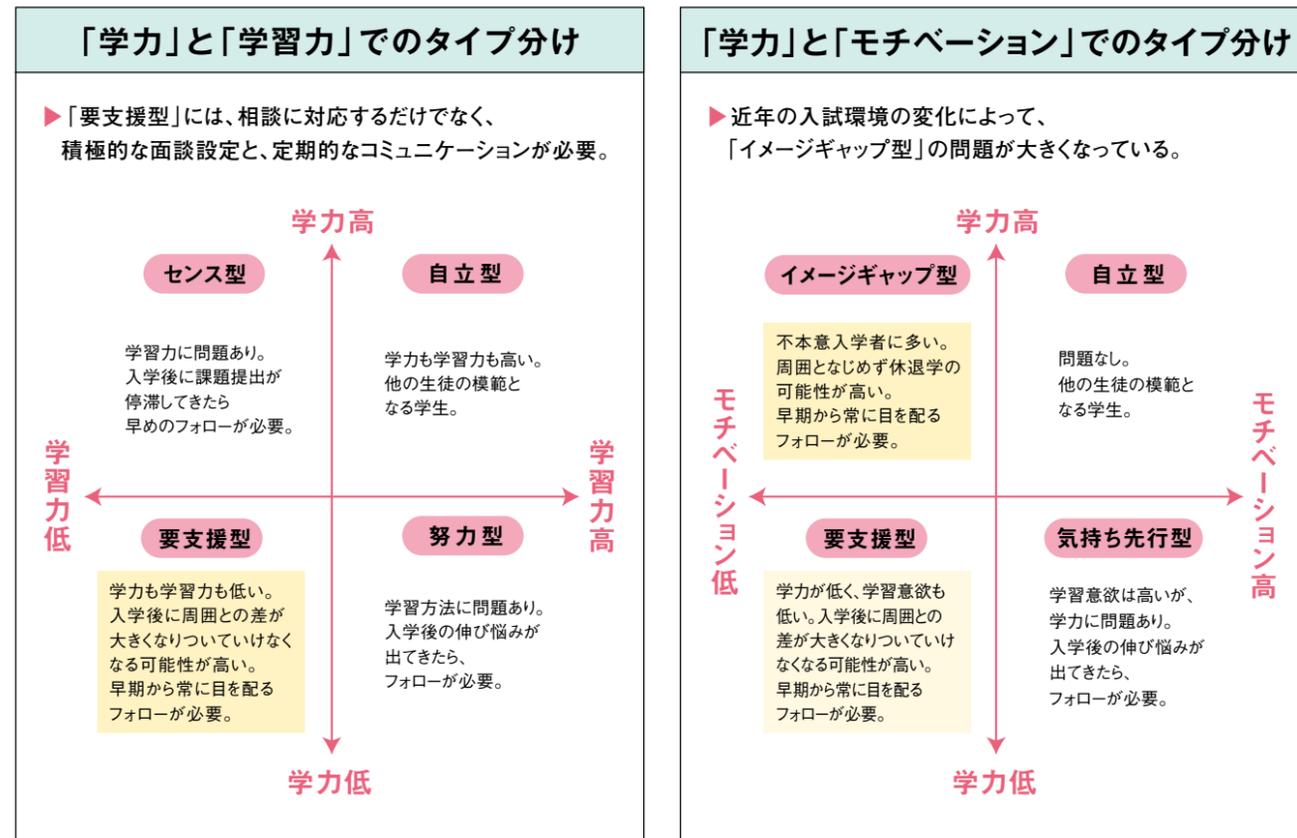
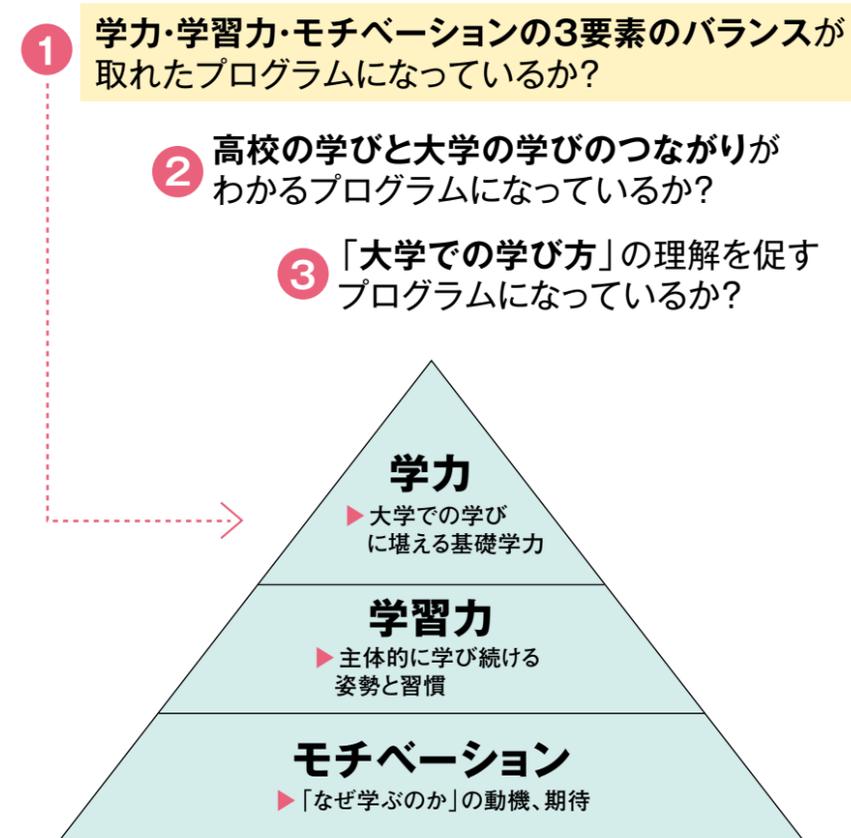


【図表2】入学者のタイプ分けの例



【図表1】入学前教育の効果を高める3つのポイント



OPINION

これからの入学前教育
多様化する学生を
大学教育につなぐ

3つのポイント

進む学生の多様化
変わる入学前教育の役割

年内入試合格者に対する入学前教育は、文部科学省が積極的に講ずるよう求めていることもあり、今や多くの大学で実施されるようになりまし。しかし、「課題への取り組みが積極的でない」「学力の向上につながる」といったプログラムの課題だけでなく、「教職員の負担が大きい」「担当部署が定まらない」といった運営上の課題も尽きないようです。

年内入試入学者が増加するにつれ、こうした課題は一層重みを増していくことでしょう。加えて次年度、コロナの環境下で入学する新入生は、高校の授業の遅れによる学力不足、超安全志向の志望校選択や、進路・大学研究不足による不本意入学といった不安要素



（様）進研アドマーケティング室
チーフランナー
中井利明
なかいとしあき ● 関西エリア、首都圏エリアでの大学支援や情報誌編集を経て、2017年より現職。高大接続やグローバル人材育成の領域を中心に、大学の教育プログラム設計・広告プランニングに携わる。

取材・文／見山雄介 撮影／亀井宏昭

のモチベーションを高めるには、②取り組み課題と大学の学びとのつながりを具体的に示すことがポイントです。そして大学における学びにスムーズに移行するためには、③大学で必要となる主体的な学び方を理解できる内容が盛り込まれていることが望ましいでしょう。

個別の学生ケアを実現するデータ取得と層別指導

より多様な学生の入学が予想される今後は、学業不振や中退を防ぐために、それぞれの学生に応じたケアと、そのための情報が必要になります。入学前教育に対する各入学者の取り組み状況や課題の得点等のデータは、入学後の教育の指導材料として有用です。もちろん、各学生の特性に合わせて一人ひとりへの個別指導ができれば理想的ですが、多くの学生を抱える大学では難しいのが現状です。このジレンマを解消するには、入学者をタイプに分け、それぞれのタイプに合わせた指導を行う「層別指導」を織り交ぜることが有効です。特に注意を要する新入生のタイプに注力して、個別にケアを行えば効果的です。

入学前教育の結果を基に行うタ

イブ分けとして、まず考えられるのは【図表2】の左図のように「学力」と「学習力」を掛け合わせる方法です。最もケアの優先順位が高いのはどちらか低い「要支援型」の入学者。大学側から積極的にフォローを仕掛けるべき層です。

また、近年の入試環境の変化によって、これまでより学力の高い入学者が増えたという声も伺います。その場合には、横軸を「モチベーション」に変更した右図のタイプ分けを適用したほうがよいかもしれません。この場合、左下の「要支援型」だけでなく、左上の「イメージギャップ型」も注意を要すると考えられます。学力は高いがモチベーションは低い、いわゆる不本意入学者にあたる可能性があり、大学での学びや学生生活に期待を抱かせるフォローを講じたいところでは。

近年、高校と大学をつなぐ育成型の入試も増えていきます。入試入学前、入学後とバラバラだった教育を一本の線でつなげるという視点で、あらためて入学前教育を見直す好機と言えます。きちんと大学で学ぶ準備ができる入学前教育を提供することが、入学者の成長を促進するだけでなく、自学の教育力のアピールにもなるでしょう。